

開催地名	長野県松川村
開催日時	令和5年7月20日（木） 19:00 ～ 20:30
開催場所	多目的交流センター すずの音ホール
語り部	高津 智子（岡山県岡山市）
参加者	松川村職員、村議会議員、自主防災組織、消防団幹部、消防委員 131名
開催経緯	松川村は過去に大きな災害が少ない地域のため、多くの職員や村民が災害に対する経験が少ない。そのため、自主防災組織の役割、避難所運営、災害時の対応に関する意識や知識の低下が課題となっている。
内容	（1）平成30年7月の倉敷市真備町豪雨災害に関して 晴れの国「岡山」。松川村同様に災害が少ない地区だった。「小田川」と支流の川が相次いで氾濫し、真備町の3割が浸水した。最大5メートルまで浸水し、逃げ遅れ者が多数発生した。そのため、51名死亡（9割が65歳以上の高齢者）した。 過去の被災経験がなく、自分は大丈夫だろうという思い込みが最大のリスクとなった。また自主防災組織の結成が不十分だったことも要因の一つとして考えられる。 隣接する総社市下原地区では、130年前の水害史実を受け継ぎ、自主防災組織の設立、避難訓練等の実施などを行っており、犠牲者がゼロであった。やはり地域防災計画を作る過程（普段の付き合い）が大事である。 （2）避難所運営を通して考えたこと。 マニュアルは通用しないこと。 ・災害発生時には、行政担当者ができることは限られている。 ・発災直後に災害ボランティアは入らない。 ・地域の条件・リスクは様々である。・非常時は平時とつながっている。 ・「人を救うのは人」ということ。 ・人の命や生活を奪う災害に向き合ったときに、どう行動するか ⇒正解はどこにもない中で、できることを、できる人が、できるときにする。 ・動かないと何も進まない「Do & Think」 ・リーダーとリーダーに協力する人が必要。チームで動く（組織）が大事。 （3）災害発生・避難所運営（7月6日（金）避難所開設） 学校の防災マニュアルは通用しないため、臨機応変に対応をすること。避難所開設2日目で食料が足りなかった。食料の配給に長い長い長い列ができ、食べ物がないってこんなに悲しいことだと実感した。断水・停電になったので、自分のスマートフォンが、情報収集や安否確認をする上で頼りだった。 災害直後に子どもたちの心身の変化（マヒ・逃避・興奮・災害遊び・退行）も出てくるので心のケアが大切である。教職員の協力で整理整頓等避難所運営が回る（ただし教職員の範疇を超えた業務）。7月10日に電気復旧し11日にエアコンを設置。エアコンがあるかないかで目に見えて、生活が変わった。そして医療チームの到着で劇的に変わる。自治運営組織、組織で動くことで成果があがる（信頼・納得・安心）。

	避難所運営において、チームの力は大きかった。各種支援団体と毎日チームの会を開いて、避難所の問題を出し合い、その解決方法を検討し、実行していった。また、地域の方との会も行い、避難所運営に協力してもらった。段ボールベッドを設置したことで、避難者の代表者を、各設置場所からに選ぶことができた。男性と女性を代表者として出すことにしたのは、その後の自主運営においてよかった。 (4) 「まさか」を「もしも」へ いつ、どれくらいの自然災害が起きるかは想定外、自然災害が起きたらどうなるかは想定内に…。想像力を高めて「もしも」に備えること、災害をイメージし、防災につながる行動を実践してほしい。 ①災害が起こった時、災害ごとの緊急避難場所や指定避難所がどこか知っているか？ ②浸水想定区域や土石流警戒区域等、災害ごとにハザードマップで確認できているか？ ③災害が発生した時にどこに逃げるか家族で話し合っているか？ ④日頃から防災について、ご近所で話し合う機会はあるか？ 上記4つの設問に対して、4つすべて出来ているかたは0名。3つは10人ほど。2つがほとんどであった。4つを目指してほしい。 (5) おわりに 災害後と言うけれど、「災害間」「災害前」かもしれない。平時での学校と地域と行政との協議をし、地域ぐるみで防災意識を高めることが大切。備蓄物品の見える化、また備蓄倉庫の鍵や電気スイッチなどの位置なども共有することが大切である。避難は「空振り」でなく「素振り」の練習。憂いがなければ備えは出来ない。非常時は平時と繋がっている。最強、そして最協(協力)の村へ防災対策を実施して欲しい。
開催地より	災害はいつどこで発生してもおかしくないがいざという時に自分の地域や家族は大丈夫という気持ちが甚大な被害につながってしまうことを災害時に活動された講師の先生からお聞きすることで再認識することができた。事前の備蓄品の準備やハザードマップ等で自分の住んでいる地域の災害リスクを知ることによって被害を最小限におさえることができるため村として呼びかけの強化を行っていきたいと感じた。また、災害発生時には地域のつながりが強ければ強いほど災害関連死を減らすことにつながるため、地域と連携した防災訓練等の強化を進めていく必要があることも感じた。 「答えの出ない悲しみをつくらない」ために最悪のケースを想定した各種マニュアルの整備、備蓄品の充実や地域と連携した取組を強化していきたい。